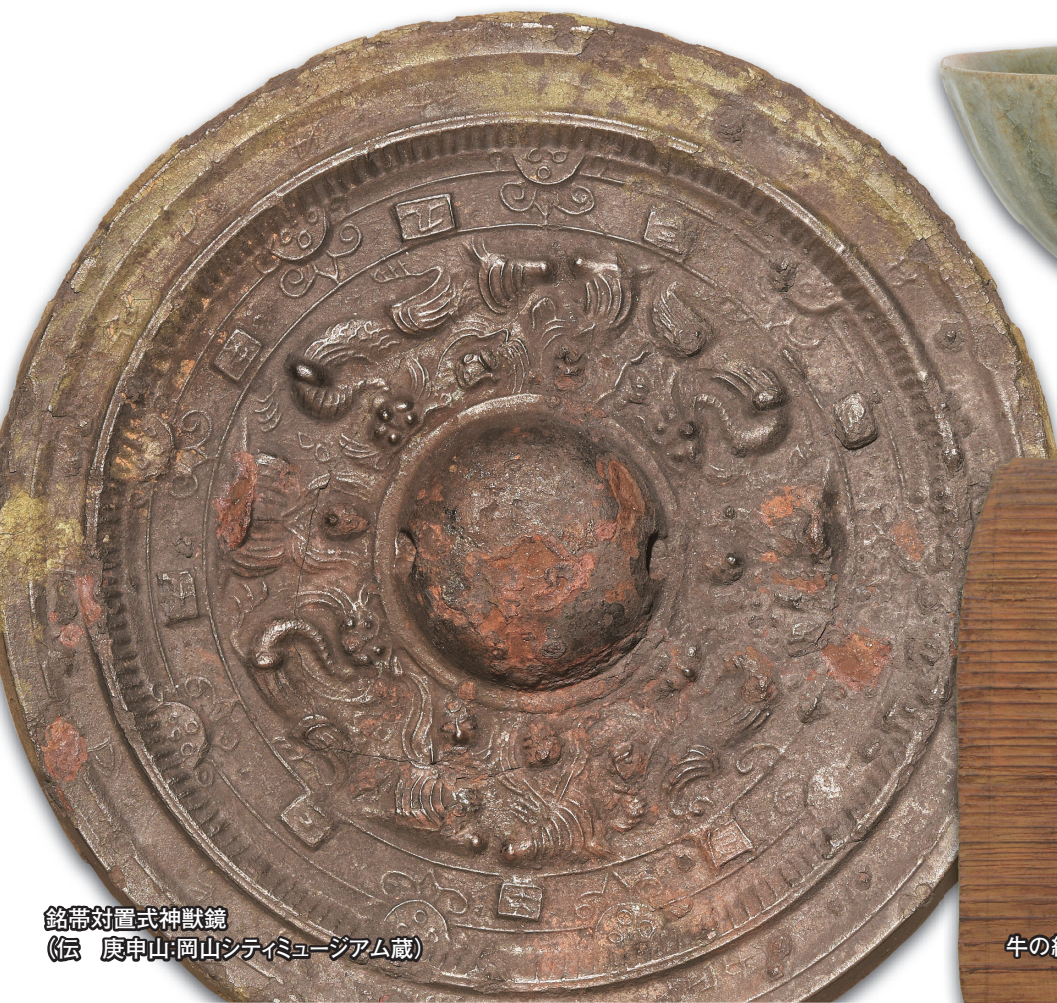


瀬戸内海が育んだ交流の記憶

1987年11月26日に設立された岡山大学埋蔵文化財調査研究センターは、2017年度で30周年を迎えました。これを機に当センターでは「瀬戸内海が育んだ交流の記憶」と題した特別展示を実施し、調査研究の成果を皆さんに発信いたします。

岡山大学の構内遺跡である津島岡大遺跡（津島キャンパス）・鹿田遺跡（鹿田キャンパス）は、瀬戸内海沿岸の岡山市に位置します。本州と四国を分かち瀬戸の海は、その誕生以後、日本列島をめぐる交流の大動脈となり、現代に至る当地域の歴史形成に大きな影響を与えています。構内遺跡からはそうした交流によってもたらされた各時代の遺構・遺物がみつかっています。海に臨む立地をいかして、活発な交流の舞台、そしてさまざまな情報交換の場として、日本列島でも独特な位置を占めていた姿が目に見えます。

今回の特別展示では最新の調査研究成果から、「瀬戸内海」を介した交流を中心に、ダイナミックな歴史展開を描き出します。私たちのルーツを探る旅へでかけましょう！
（南 健太郎）



銘帯対置式神獸鏡
《伝 庚申山・岡山シティミュージアム蔵》



龍泉窯系青磁碗
（鹿田遺跡）



牛の絵馬（鹿田遺跡）

人類の定着から農耕社会へ

海の動きを探る

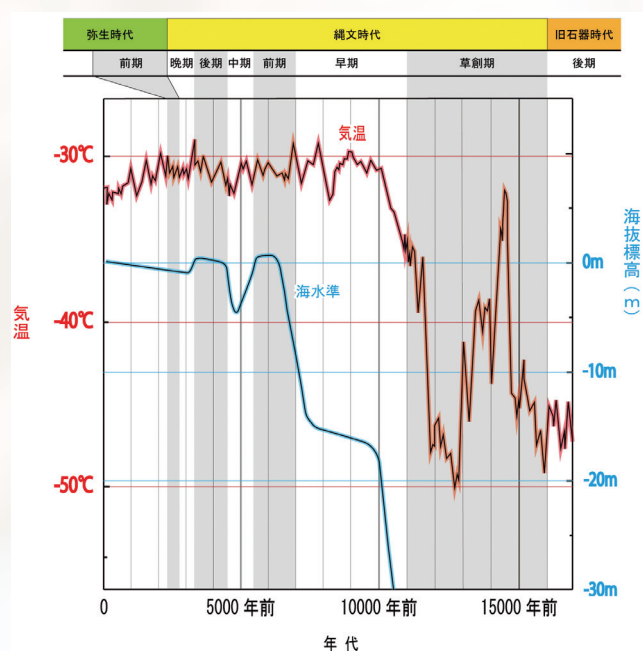
土地の形成は、海の動きと深い関係があります。瀬戸内海からは旧石器時代の動物化石が多数出土しており、この時代は本州と四国が陸続きであったことがわかります。では、両者を分かち海はいつ誕生し、人々の生活の舞台となる土地はどのようにして作られたのでしょうか？

その謎を解くヒントは地層にあります。気候の変化によって海の高さは上下し、土砂の堆積とあいまって、海岸線の位置は絶えず移動していました。その痕跡は氷や土に残されています。中央グリーンランドでは氷の層の分析から気温の変化が復元され、岡山平野ではボーリング調査によって海の高さの変化が明らかにされています。

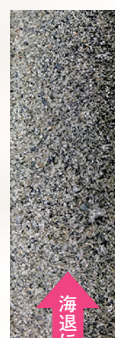
約10,000年前には気温が上昇し、約8,000年前の縄文時代早期には、海水準が上昇しています。瀬戸内海の誕生はまさにこの時であったようです。また、地層の特徴をみると、それぞれの時代で土の構成や塩分の有無に違いがあることがわかります。それによると、海進は縄文時代前期と後期に生じており、両時代には岡山大学津島キャンパスのそばまで海岸線がきていたことがわかりました。縄文時代後期の

海進後、弥生時代の開始期には岡山大学鹿田キャンパスよりも南側まで海は後退していたようです。

気候の変化にともなう海の動きは、人々の生活をも変えました。海進が最も進んだ縄文時代前期(約7,000年前)に、当地域には貝塚が登場します。海の恵みを享受した、新たな縄文人の生活が始まりました。貝塚は、寒冷化した中期に増え、温暖化に転じた中期末以降縮小します。一方で、貝塚縮小期の前後は土地の形成期でもあります。この時期は大量の土砂によって低地が埋められ、広い微高地が作られました。そこには人々が生活するのに適した環境が広がり、まもなく集落としての利用が始まります。



気温の変化と海水準の変動



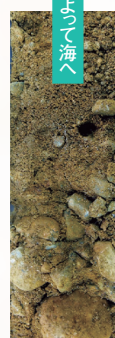
縄文時代中期の地層
河川の下流

構成：淘汰された細粒～
中流の砂
→流れやや弱い
※塩分無し



縄文時代早期の地層
浅い海の底

構成：泥→流れがない
巣穴あり
※塩分を含む



旧石器時代の地層(洪積層)
河川の中流

構成：円みのある礫と砂
→流れがやや強い
※塩分無し

鹿田遺跡の地層からみた縄文海進と小海退

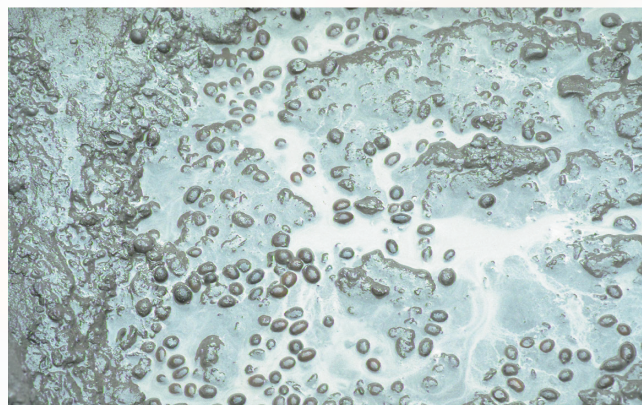
貝類利用から植物の栽培・貯蔵、そして水稻農耕へ

津島岡大遺跡は縄文時代後期の当地域を代表する集落遺跡で、その時代の地形環境や、そこに営まれたムラの姿を復元することができます。

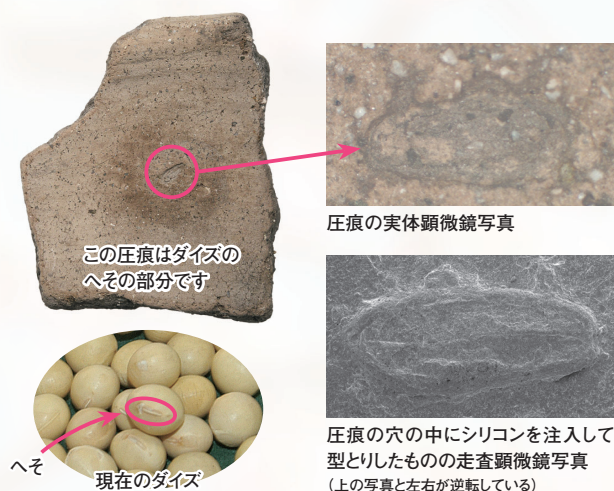
生業活動で注目されるのはドングリなどの堅果類の貯蔵とマメ類の栽培です。堅果類は住居周辺の河辺や低湿地に掘られた直径0.8～1.0mの貯蔵穴に保管されます。貯蔵穴の底のドングリは、上部を厚く重ねた枝や葉っぱ、粘土によって密閉されます。地下水による湿潤な環境である点とあわせて、生で保存されていたと考えられます。人々は貯蔵穴の利用により、季節や天候からの大きな影響を受けることなく、食料不足への備えができるようになったこと

でしょう。一方、植物栽培の痕跡は土器に残されていました。縄文時代後期中葉の土器表面で、ダイズの圧痕がみつかりました。ダイズは堅果類よりも栄養価が高く、保存も可能です。新たな保存食の貯蔵と栽培は自力での食料確保を可能にしました。

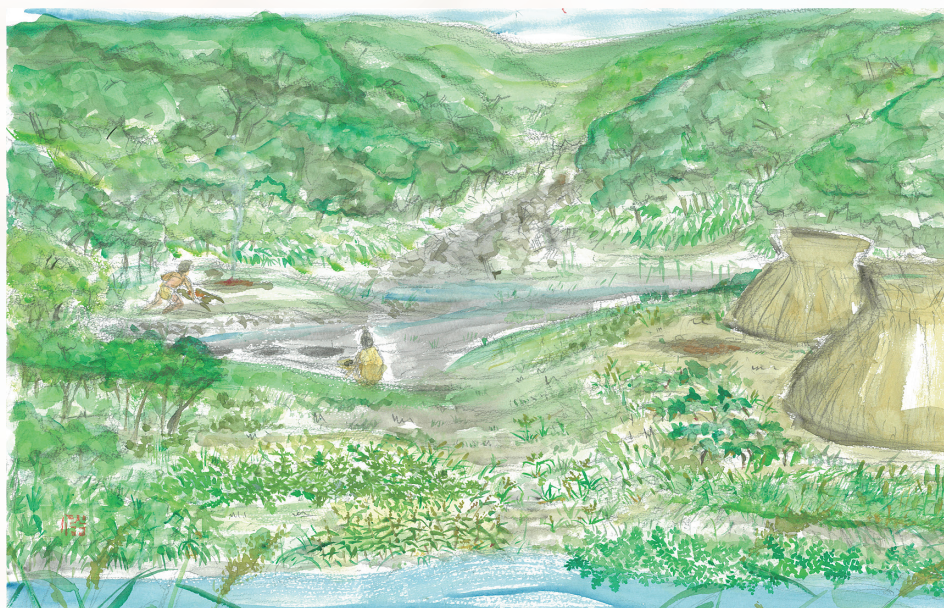
縄文時代の終わりになると、気温は再び低下し、平野部は拡大しました。そこには湿潤な泥炭質の土壌が広がり、弥生時代が始まる頃に水稻農耕が伝わりました。貯蔵と栽培の知識、地形環境という要素がそろった時、農耕社会への新たな一歩が踏み出されたのでしょうか。



貯蔵穴のドングリ(津島岡大遺跡第5次調査)



ダイズの圧痕(津島岡大遺跡第5次調査)



縄文時代後期の津島岡大ムラ(復元イラスト)

縄文後期の津島岡大ムラ

縄文時代後期(約4,000年前)の津島岡大ムラと周辺の地形環境です。発掘調査やボーリング調査で得られた標高データを基に復元しました。

ムラの中には中央に一条の河川が走り、眼前には海が迫っていたようです。ムラの北東部には最も広い微高地が存在し、そこに住居が作られています。その周囲では貝塚、貯蔵穴、石器素材の保管などがみられ、様々な活動がおこなわれたようです。また、住居から離れたところでは火処や、河道に打ち込まれた杭列がみられます。

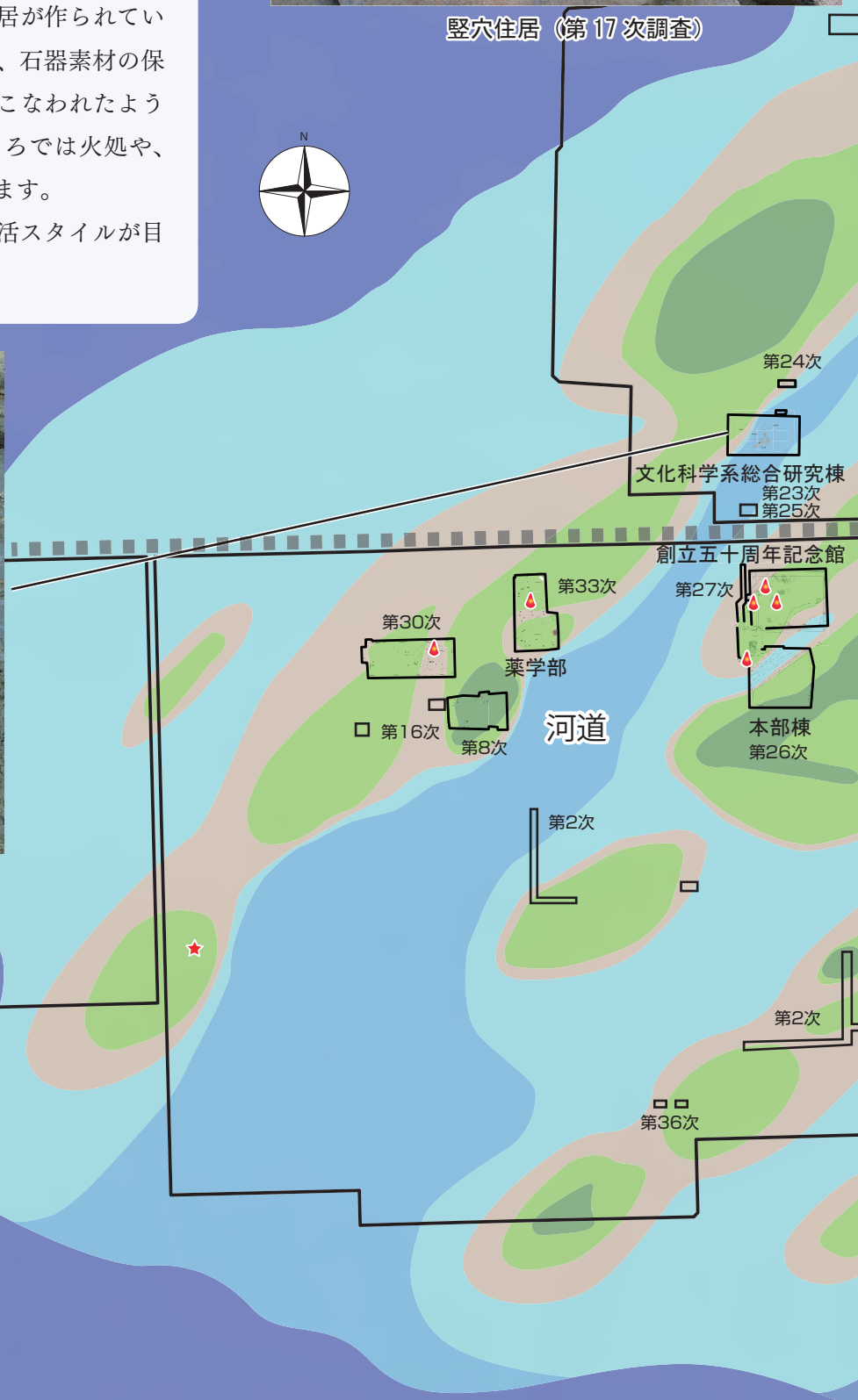
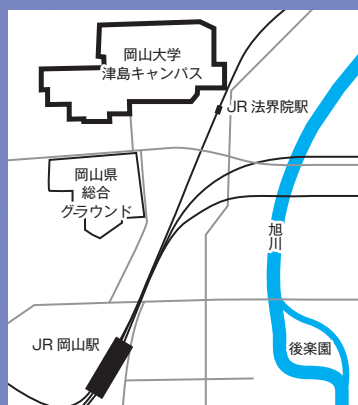
縄文時代後期の人々の営みや生活スタイルが目に見えそうです。



竪穴住居(第17次調査)

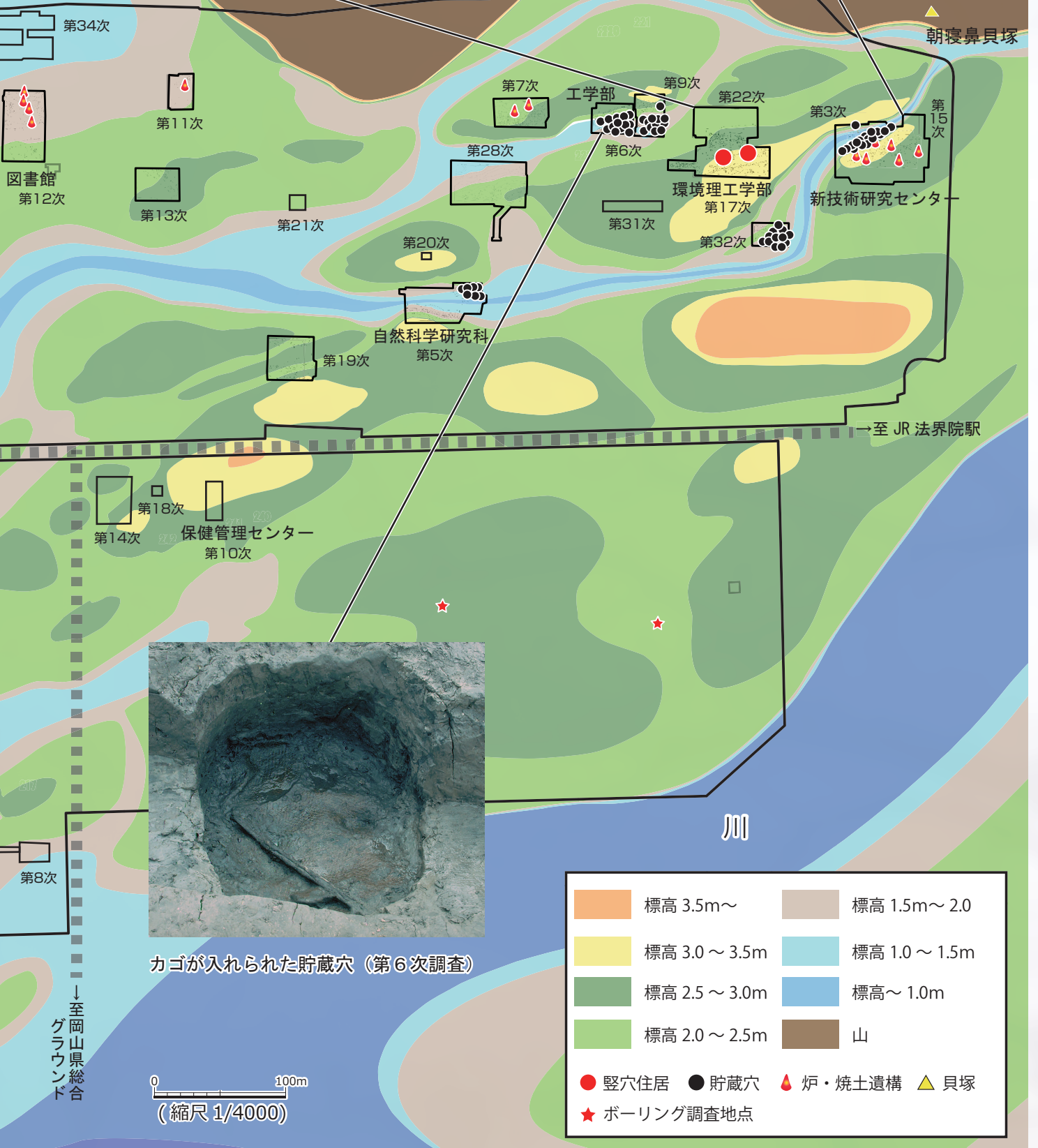


河道の杭列(第23次調査)



半田山

集積されたサヌカイトの
石器素材（第15次調査）



瀬戸内海沿岸への進出とモノ・ヒトの交わり

鹿田ムラの誕生

弥生時代中期後半(約2,100年前)には寒冷化が生じ、土地が大きく南へと広がりました。鹿田遺跡周辺は海に突き出るように微高地が形成され、そこに集落が形成されました。海に臨む鹿田ムラの誕生です。

鹿田ムラは3件程度の住居で構成される小さなものでした。しかし製塩活動と特殊な井戸のマツリは注目されます。両者はそれまでの岡山平野ではみられず、鹿田ムラは新しい生活スタイルをいち早く導入した、先駆的な集落であったと考えられます。



弥生時代の鹿田ムラ

モノ・ヒトが交わる舞台

鹿田ムラはその立地的な特性を活かした、交流の舞台でした。そのことを示す遺物に土器があります。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、鹿田ムラでは他地域から搬入された土器が出土しています。土器は全体的なプロポーショナルが各地域で異なっており、技術や胎土の地域性も顕著です。それらを観察することによってどこから土器がもたらされたかがわかります。土器の移動からは各時期において、どの地域とつながりをもっていたのかを検討することができます。

弥生時代後期前半はほとんどの土器が在地で作られたものですが、香川県(讃岐)からもたらされたと考えられる土器が出土しています。弥生時代後期後半も同地域から土器がもたらされており、瀬戸内海を縦断する南北の交流がメインであったようです。

一方、古墳時代初頭には、その状況が一変します。讃岐に加え、徳島県(阿波)や、山陰、近畿地方で作られた土器もみられるようになります。この時期は前方後円墳の成立期であり、より広域な地域間関係が形成されたと考えられます。



吉備



讃岐



山陰



近畿



阿波

古墳時代初頭の在り土器と搬入土器(鹿田遺跡第1・7・12・24次調査)

弥生・古墳時代の銅鏡

銅鏡は何を語るか

日本列島では、銅鏡は所有者の性格をあらわすものでした。弥生時代中期後半の北部九州では、王の墓に中国からもたらされた銅鏡(漢鏡)が大量に副葬されていました。それ以後、漢鏡を模倣して中国以外の地で作られた銅鏡(仿製鏡)や漢鏡の破片も利用されるようになり、銅鏡の保有層は一気に広がりました。また古墳時代前期の三角縁神獣鏡は、魏の皇帝から邪馬台国の女王卑弥呼に送られた「銅鏡百枚」とも関連していると言われています。銅鏡からは大陸から日本列島におよぶ政治的なつながりや、地域間関係の実態を読み取ることができるのです。



(伝)庚申山
銘帯対置式神獣鏡
(岡山シティミュージアム所蔵)

岡山県下の銅鏡

岡山県南部では、さまざまな銅鏡が出土しています。弥生時代後期の遺跡では小形仿製鏡や破鏡が出土していますが、古墳時代開始期前後からは、完形の漢鏡が流入するようになります。中でも三角縁神獣鏡は、岡山市備前車塚古墳で11面が出土しており、近畿地方以外では最多です。

また岡山シティミュージアム所蔵の伝庚申山とされる銘帯対置式神獣鏡は、日本列島では希少な三国時代の呉の領域で製作されたものです。また同館には魏の領域で製作された銅鏡と同じ特徴(長方形の鈕孔)をもつ獣首鏡も所蔵されています。



吉原6号墳
上方作系浮彫式獣帯鏡
(山陽郷土資料館所蔵)



出土地不明
獣首鏡
(岡山シティミュージアム所蔵)



備前車塚古墳
三角縁神獣鏡
(東京国立博物館所蔵)
画像提供：東京国立博物館

備前地域の須恵器生産と鹿田遺跡

日本列島における須恵器生産の開始

須恵器は青みを帯び、硬く焼きしまったうつわです。5世紀の初め頃に朝鮮半島から陶質土器がもたらされ、時をおかず、こうした焼き物を作る技術も日本列島へ伝えられました。大阪府堺市陶邑窯跡群

では大規模な生産が始められました。津島岡大遺跡では初期段階の須恵器が出土しています。当遺跡周辺では極めて珍しく、須恵器使用の広がりを考える上で重要な資料です。

備前地域での須恵器生産と鹿田遺跡

現在の岡山県備前市から瀬戸内市の一帯(備前地域)は、古墳時代後期に中四国地方最大の邑久古窯址群が形成されて以降、須恵器生産が活発におこなわれる地域です。

7世紀以降に窯が築かれた寒風古窯址群で焼かれた須恵器は、藤原京や平安京に運ばれています。また瓦葺屋根の端につけられた鴟尾、文字を書くときに使用する硯、文字が刻まれた須恵器、陶馬といった国府などから出土する遺物も生産されています。これらの遺物からは公的な性格の窯であったことが考えられます。鹿田遺跡では7世紀前半前後の短期間に小規模な集落が営まれます。胎土分析の結果、この時期の須恵器には寒風古窯址群で生産されたものが含まれていることがわかりました。瀬戸内海と

旭川の結節点に位置するという立地から、鹿田遺跡も須恵器の流通をはじめとした経済活動の一翼を担っていたようです。

また、鹿田遺跡で出土する平安時代前期(9世紀代)の杯は、備前地域で生産されたものであることがわかりました。さらに平安時代末～鎌倉時代(12～13世紀代)の捏ね鉢は東播系が主体ですが、備前産のものも確認されています。備前地域と鹿田遺跡は、生産地と消費地という関係で結ばれていたようです。

古墳時代以降培われてきた備前地域での須恵器生産は、その後備前焼へとつながっていきます。



寒風産の須恵器(7世紀:鹿田遺跡第1次調査)



東播系の須恵器(12世紀:鹿田遺跡第8次調査)

殿下渡領、鹿田庄の成立

殿下渡領と鹿田庄

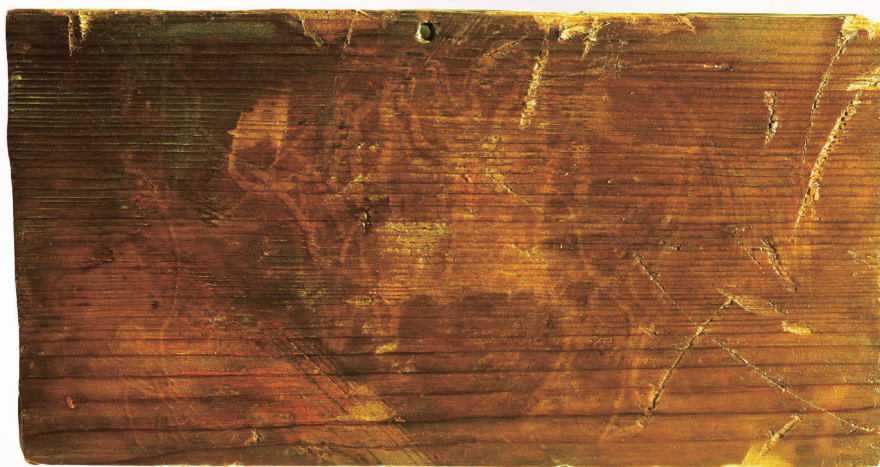
平安時代に権勢をふるった藤原氏は全国に私有地である荘園を有していました。その中でも摂政や関白を輩出する藤原摂関家の氏長者に代々受け継がれる「殿下渡領」が全国に4ヶ所設置されました。その4ヶ所とは大和国佐保殿、越前国片上荘、河内国楠葉牧、そして備前国鹿田庄です。鹿田遺跡は鹿田庄の比定地であり、多くの関連する遺構・遺物が確認されています。

817年の文献には、「鹿田」の地でとれたお米が、藤原氏の氏寺である興福寺でおこなわれた法華会において使われたことが記されています。このことから9世紀前葉には藤原氏による土地開発が及んでいたことがわかります。

絵馬が示す都との関わり

鹿田遺跡では8世紀後半の井戸から2枚の絵馬が出土しています。1点には猿が馬の手綱を引く「猿駒曳こまひき」が、もう1点には「牛」が描かれていました。この時期、猿駒曳の絵馬は他に例がなく、牛の絵馬も最古のものです。奈良・平安時代の絵馬は、主に都や地方の役所に関連する遺跡で多くみられます。

平城京では長屋王邸の近くから738年を下限とする最古段階の絵馬が出土し、邸内の井戸からは猿が描かれた土器がみつかりました。当時の都では、馬は人の疫や穢を祓い、猿はその馬の穢を祓う動物と考えられていました。馬と猿を組み合わせた構図が描かれた鹿田遺跡の絵馬には、都の祭祀に関する情報が込められているかのようです。



猿駒曳

墨の残りが悪く、描線の痕跡のみが確認されます。

馬の口元からのびる手綱を、猿が両手で引いています。猿は目や耳が大きく描かれています。馬には鞍、障泥、鐙などが描かれており、豪華に飾られています。



牛

墨の残りが良好で、体の特徴がよくわかります。

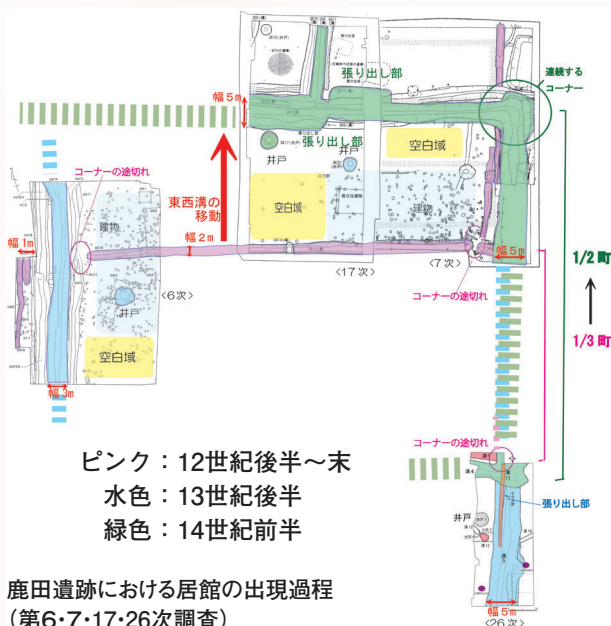
角、蹄、尻尾は、牛の特徴が正確に捉えられており、足の筋や前脚から首にかけてが波打つ姿、ひざの関節といった細かな部分まで写實的に表現されています。頭には房のような飾り、胴体には帯が確認でき、牛も飾られていたようです。

居館の誕生と交流の活発化

屋敷地から居館へ

鹿田遺跡では12世紀には区画溝による屋敷地が整備され、鹿田キャンパス全体に広がります。この時期の屋敷地はほぼ同じ規模で、等質的に区画されていたと考えられます。

13世紀以降、その状況が一変します。敷地の西側に大溝で囲まれた閉鎖的な空間が出現します。大溝は小舟の往来が可能で、一部テラス状の張り出し部があり、船着き場であった可能性もあります。その様はまさに居館と呼ぶにふさわしいものです。居館を囲む溝からは、旅芸人である傀儡まわしが使う猿形木製品が出土しています。この場所がヒト、モノの集まる場所であったことがわかります。



ピンク：12世紀後半～末
水色：13世紀後半
緑色：14世紀前半

鹿田遺跡における居館の出現過程
(第6・7・17・26次調査)



猿形木製品と傀儡まわし(左:鹿田遺跡第7次踏査)
(右:洛中洛外図(歴博甲本)より)



盛んな経済活動

平安・鎌倉時代には、食器などの生活用具が地域を越えた広がりを見せます。また大陸からは多くの陶磁器がもたらされ、日本列島の各地にもたらされます。それらの動きからは、当時の経済活動の一端を知ることができます。

鹿田遺跡では居館が誕生する13世紀以降に、より活発な交流がおこなわれたようです。陶磁器では中国龍泉窯系の青磁碗が出土しています。青磁碗は武士と考えられる人物の墓に副葬されていました。またこの時期の広域流通品である石鍋も複数出土しています。鎌倉時代の物流において、鹿田遺跡に集った人々が活躍していた姿が思い浮かびます。



墓に副葬された龍泉窯系青磁碗
(鹿田遺跡第25次調査:右頁下の墓から出土)



滑石製の石鍋
(鹿田遺跡第9・11次調査)

中世の墓と副葬品

鹿田遺跡では副葬品を有する平安時代の墓が2基、鎌倉時代の墓が2基みついています。墓の構造や副葬品の内容はそれぞれで異なっており、そこからは鹿田庄が営まれた時代の人々の姿を読み取ることができます。

平安時代の親子の墓か

平安時代の墓は穴を掘って遺体をおさめた土壇墓で、木棺などを用いた墓はみつかりません。副葬品は土師器の碗や皿、銭、玉で、際だったものはみられません。ただし、2体の人骨が出土した墓は異彩を放っています。墓の主は成年以上でしたが、頭骨付近に置かれた木製の台には12～19歳以下の人物の頭骨が置かれていました。子どもの頭骨には白磁の皿と碗が被せられていました。特殊な儀礼行為と言えるでしょう。



平安時代の墓
(鹿田遺跡第25次調査)

鎌倉時代の武士の墓

鎌倉時代の墓には、複雑な構造の木棺に多様な副葬品をおさめたものがあります。

烏帽子が出土した墓は、特に注目されます。まず1.8m×1.1mの墓壇が掘られ、さらに中央に径0.6mの穴が掘られていました。穴の中では11点の土師器皿が折敷に乗せられ、中央には5枚の銭が鉄の棒に通された状態で置かれていました。これを埋めた上に1.3m×0.7mの木棺が据えられ、烏帽子を被った

状態で熟年の男性が葬られていました。周辺には小刀と毛抜きがありました。また被葬者の頭部方向には、墓壇と木棺の間に青磁碗2点、白磁皿2点が重ねておさめられていました。烏帽子は武士が被る折烏帽子でした。このような手厚い埋葬方法や豪華な副葬品は鹿田遺跡で際立っています。被葬者は武士で、かなりの財力を持ちあわせていたと考えられます。



鎌倉時代の武士の墓(鹿田遺跡第25次調査)

農村・軍都・そして学都へ

農村から軍都へ

岡山城が築城されて以降、鹿田遺跡と津島岡大遺跡は耕作地として利用されるようになります。発掘調査では水田畦畔や畠の畝、野壺と考えられるたくさんの土坑が確認されています。

津島岡大遺跡では、その状況が1907年以降一変します。陸軍第十七師団が岡山に置かれることとなり、現在の岡山大学津島キャンパスや岡山県総合グラウンドでは、駐屯地や練兵場をつくるため田畑を埋め立てることになりました。1907・08(明治40・41)年には大規模な工事が行われ、周辺の山々を切り崩し、トロッコで大量の土砂が運び込まれました。津島キャンパス構内には、たくさんの旧陸軍関連施設が残っています。赤レンガ造りの建物やレンガ作りの門柱は現在も使用されており、当時の面影を伝えています。

岡山大学の誕生と現在

戦後、連合軍に接収されていた旧陸軍岡山駐屯地の広大な用地と多くの建物は1947(昭和22)年に大蔵省に返還されました。同じころ、岡山に総合大学を設立する動きもあり、旧陸軍駐屯地の跡地はその有力な候補地とされました。戦後の荒廃した世情もあり、第六高等学校の学生数十名が毎晩徹夜で建物や用地をまもり、ガラス等の盗難に警戒したと伝えられています。

1949(昭和24)年、新制岡山大学は、岡山医科大学・第六高等学校・岡山師範学校・岡山青年師範学校・岡山農業専門学校の諸学校を母体として創立され、法文学部・教育学部・理学部・医学部・農学部の5学部と医学部附属病院、放射能泉研究所で発足しました。2017年現在、岡山大学には11学部7研究科3研究所、大学病院そして附属学校園が設けられています。



現在の岡山大学津島キャンパスとその周辺(2017年9月15日撮影:半田山上空から)

編集後記

特別展示の準備中は、忘れかけていた調査時の記憶がよみがえってきました。構内遺跡の調査成果をまとめるにあたって、30年間の蓄積の大きさを実感しました。30周年を新たなスタートラインとして、これからも前進していきたいです。(南)



岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER, OKAYAMA UNIVERSITY
〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1番1号
TEL・FAX (086) 251-7290
[ホームページ]
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>